
空砲

夢野

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空砲

【Nコード】

N0165J

【作者名】

夢野

【あらすじ】

桐沢晶はリストカットしている。その噂を聞いた潮は、自分が自殺しようとした事を思い出す。

空砲が

赤い赤い血が流れると思った。

そして、俺はここに倒れるのだろうと想像した。

引き金を引けば、死ねるのだろう。

俺はそれを握りしめた。

幸い、ここは放置された建設途中のビルの中。誰もいない。

俺はその銃口を胸に向けた。

よく映画とか漫画では頭に付けてたけど、こっちの方が格好良く死ねると思った。

躊躇いはあったけど、それ以上に好奇心があった。

「死」はどういう物かという好奇心。

引き金を引いた。

パンという音がした。

けど、俺の胸から血は流れなかった。俺は冷たいコンクリートに倒れてなかった。俺は生きていた。

空砲だった・・・。

噂

青い空と白い太陽。

南向きの校舎の二階。窓際の席は日差しがきつくて、授業を受ける気にならなかった。早く授業が終わってほしい。

「あー……。後、三分か。切りも良いし、これで授業終わりにするか。号令。」

先生の一言に教室にざわめき声が広がる。
その中にまぎれて聞こえてきた俺の名前。

「潮。」

宏人が俺の所に来た。

宏人は俺の小学校の頃からの友人。

「飯喰いに行こうぜ。」

俺は宏人の誘いに無言で頷いて、立ち上がり、バックから五百円玉を取り出した。

俺と宏人は、ゆっくり歩きながら購買へ向かった。その間、今度のテストの話とか部活の話とか、クラスメイトの変な噂の事を話していた。

その中の一つ。単なる暇つぶしの一環のたわいのない話。

「なあ、潮。晶ちゃんの噂知ってるか？」

「晶？ 誰それ？」

「同じクラスの桐沢晶ちゃん。きりさわあきじ」

「桐沢晶……。」

聞いたことがあるような、無いような名前。少し考えてから、あのクラスメイトの顔が頭に浮かんだ。

桐沢晶。クラスメイトの一人で、どっちかと言うと大人しめな女子で、一度も話したことがない。

「ああ、あいつがどうかしたのか？」

「……本当かどうかは知らないんだけどよ。」

ちょうど購買について、パンを選びながら話を続けた。

「晶ちゃんってリストカットしてるみたいだぜ。」

「はあ？ なにそれ。」

思わず、パンを選んでいた目を宏人の方を向けてしまった。

「それ本当かよ？」

「だーから本当かどうかは分からないって。」

身近にいる人がリストカットしているだなんて、気分が悪い。

そして、桐沢晶がリストカットをしている場面を想像して、次に浮かんだ場面は引き金を引いた、あの時の俺の手だった。

「四百五十円。」

はっとして、前を向いた。購買のおねえさんともおばさんとも呼

べない微妙な歳の女の声だった。俺は慌てて五百円玉を渡して、おつりの五十円を受け取った。そして、俺は早くその場から立ち去りたくて、宏人に「先に行ってる。」と行って早足で教室に戻った。

教室にはクラスメイトの半分ぐらいが、それぞれ集まって昼ご飯を食べていた。あの桐沢晶もその中にいた。

あんな噂を聞いた後だから、彼女の両腕が気になってしまった。けど、制服で隠れているのだから、リストカットの痕など見えるわけがなかった。それに噂なんだから、リストカットなんてやってないのかもしれない。

それに、友達の中で楽しそうに笑っている彼女が、リストカットなんてするような悩みを持つてとは思えない。

俺は自分の席に座って、宏人を待つ事にした。宏人は一分もしないうちに追いついて、俺の前の席に座る。

それからパンを食べながら、また、俺達はたわいの無い話をした。さっきの桐沢晶の話も宏人の頭から消えていっただろう。俺も宏人の話を聞いている内に、桐沢晶の噂もあの光景も忘れていった。

桐沢晶

午後四時。

授業が終わり、クラスメイト達は家に帰る者、街に遊びに行く者、部活に行く者とそれぞれ教室から立ち去っていく。

宏人も部活があるからと言って、早々と教室から立ち去った。

俺は特に部活に所属してない。去年はサッカー部に所属していたけど、医者から退部を勧められ、やめた。

それから、宏人に軽音部に入らないかと勧められたり、他の友人からもいろいろ言われたけど、サッカー以上にやりたい物はなかった。

そして、退部してからの放課後の時間は、ここからサッカー部の活動を眺めるのが日課になっている。

サッカーなんやりたくない。と言ったら、嘘になる。でも、戻れないのだ。

「あ。」

思わず声を出してしまった。

サッカー部入り立ての一年生のシュートは、ゴールにかすりもせず、ボールは上を通り過ぎていった。

「ヘタクソ。誰だあれ。」

その一年生は二年の先輩に呼び出され、注意されている。その一年生は、何処かで見た顔だった。

「あれ・・・佐伯君？」

後ろの方からいきなり俺の名前を呼ぶ声が聞こえて、慌てて振り向いた。後ろのドアの所にいたのは、あの桐沢晶だった。

思わず、手首の方に目がいつてしまいが、あの時と同じで、制服に隠れているのだから、リストカットの痕なんか見えるわけなかった。

桐沢晶は、ゆっくり口を開いて話し始めた。

「どうしたの佐伯君。一人で・・・。」

桐沢晶。という人物を初めて見た気がする。こんな風にちゃんと声を聞いたこともないし、こんな風に彼女の姿をよく見た事もなかった。

にしても、よく俺の名前覚えてるな。と感心した。(佐伯は俺の名字。)クラス替えしてまだ二週間しか経ってない今の時期、俺は男子の名前さえうる覚えだ。

「・・・外を見てるだけ。」

俺がそう答えると、

「外？」

と桐沢晶は俺の隣まで来て、窓から外を見た。

「サッカー部を？ あっ、佐伯君ってサッカー部だったよね。でも、去年の十二月ぐらいにやめちゃって・・・。」

なんで知っているのか気になったけど、平静を装った。

「ああ。」

「なんでやめたの？」

なんでって聞かれても、やめた理由はすぐ答えられる物じゃない。やめた理由を知っているのは、宏人と一部のサッカー部員だけだ。それぐらい、人には話したくない理由。

「別に・・・どうでもいいだろ。」

そう答えると、桐沢晶は、ふーん、とだけ言って、髪を翻し自分の机に行った。机からノートを取り出している。桐沢晶が教室に来たわけは、忘れ物だったのか。となぜか安堵感が俺を包んだ。そして、なんで部活の事を知っているのか気になって、聞いてみた。

「なあ。」

彼女は長い髪を耳にかけて、顔を上げた。ノートを抱きかかえている。

「なんで俺が部活やめた事知ってんの？」

桐沢晶は唇に手を当て、悩むような仕草をした。そして、口を開けた。

「・・・街中から少しはずれた所に、建設途中のビルがあるよね。」

ドクンと心臓が鳴った。

「去年の十二月、そこで佐伯君を見たんだ。拳銃を握ってる佐伯君を。それから、君のことが気になって、調べたの。」

空砲の音とほこりっぱい空気と引き金を引いた右手が頭に浮かぶ。

「あの時さ、死んじゃうのかなあって思ったけど、空砲だったね。良かったよ、目の前で人が死ぬところを見なくて。・・・でもさ、あれ、本気だったの？」

彼女は、ニツコリと笑っていた。なんて答えれば良いのか分からなくて、その場に立ちつくしてしまう。

どう見ても普通の女子高生である彼女が悪魔のように見えてしまった。

「驚いたよね。んー・・・今はいいや。また今度、話してくれないかな？ 安心して、誰にも話してないし、誰にも話す気は無いから。」

桐沢晶はそう言うのと、手を振りながら教室から立ち去った。

俺は口に溜まって、飲み込みたくて仕方なかった唾をやつとの思いで飲み込んだ。そしたら、急に足の力が抜けて、椅子に座り込み、ぐっちゃぐちゃになった頭を整理した。息を整える。

桐沢晶はあの時の俺を見ていた。

宏人にも話してないあの時の俺を・・・あいつは見えていた。追い掛けなければ。と本能がそう言った。

立ち上がり、教室から飛び出した。左に桐沢晶はいない。右に・・・いた。彼女はちょうど、階段を下りようとしている所だった。

病気の事。を忘れて、俺は走って階段の方に向かった。全力で、

「桐沢晶！」

なんとか階段の所まで来て、下を見下げた。桐沢晶はきょとんとした表情で、俺を見上げた。

「桐沢晶・・・・・・・・お前・・・」

体に違和感を感じて、自分がしたことを後悔した。胸が苦しい

「・・・・・・・・ぐっ・・・・・・・・う・・・・。」

俺はその場に倒れ込んだ。その後の事はあんまり覚えてない。うつすら覚えていることは、桐沢晶が俺を呼ぶ声。

保健室

鼻につく消毒液の匂いがして、目を開けてみた。天井にあったのは明かりの付いていない蛍光灯。俺はベットに寝ていた。周りにあるカーテンを開けると、そこは学校の保健室。夕日が差していた。誰がここまで運んでくれたは知らないけど、時計を見て、もう帰る時間だと分かって、ベットから起きる。

ふと、ドアの近くにあるゴミ箱の中を覗いてみた。俺の薬が入っているはずのケースが入っていた。中には薬は無い。

ドアを開けて、自分のバックを取りに戻るため教室への道を歩いた。

桐沢晶が保健室まで運んでくれたのだろうか。いや。あんな女が男を運べるだけの力があるとは思えない。じゃあ、先生が？ それもないだろう。先生達には薬の事は教えていない。薬の事を知っているのは……

「あー！ 潮ー！」

前から聞こえる声に顔を上げると、二つのバックを右肩にかけるという変な格好をしている宏人がいた。

「宏人。」

宏人は俺の所まで駆けてきた。

「ったく！ 心配かけやがって……。今は大丈夫か。」

「ああ……。一応。」

「そっか。」

宏人の持っているバックは俺のだと分かって、

「バック。」

と言ったが、「俺が持つ。」と言って渡してくれなかった。

「もうそろそろ学校閉められるからな。行くぞ、潮。」

「あー・・・。」

俺達は昇降口の方に向かった。

「宏人。」

「あ？」

「俺を保健室まで運んだのって、お前？」

「そーだよ。軽すぎだよお前。簡単に運べたぜ。もうちょっと太れ。」

「薬も・・・。」

「俺が無理矢理飲ませた。」

やっぱり、全部宏人がやってくれたんだ。じゃあ、あの桐沢晶は。

「桐沢晶は？」

宏人はその質問に顔をしかめた。

「・・・晶ちゃんがいきなり軽音楽部の部室にやってきてさ。俺を部室の外に呼び出して、潮が倒れた。って言われて・・・。」

先生じゃなくて、宏人呼んでくれたのは有り難いけど、なんで宏人を呼んだんだ。普通だったら、まず先生を呼ぶだろう。

「あいつさ、顔色一つ変えずにそう言っただ。そしたら、そのまま帰っちゃったんだぜ。『誰にも言わないから』っとか言ってるで、潮の病気を知ってるみたいだった。」

知っているのかもしれない。俺の事を調べたと言っただくらいだ。病気の事を知っていたとしてもおかしくない。そして、万が一の時の処置の仕方を知っているのは宏人だけ、という事を知っていても・・・。それだったら、先生を呼ばずに宏人を呼んだ辻褃が合う。

「なあ、なんで発作起こしたんだ？」

俺は宏人に話そうか迷った。俺はあの事を宏人に話したくない。だから、適当に誤魔化した。

「桐沢晶が教室に忘れ物を取りに来てさ。少し話したんだ。その時、桐沢晶が取りに来たノートをまた机に忘れてさ、それで思わず走って・・・。」

「馬鹿。そんなことで走るなよ。っていうか、忘れ物？ リストカツトの間違いじゃないか？」

「いや。たぶん違う。」

「ふーん。まっ、晶ちゃんがリストカットしてないにしろ、あんま関わらない方が良いと思うぜ。」

宏人は少し間を開けてから、「変だよ、あいつ。」と付け加えた。

過去

家に着いて、俺は母のいるリビングに向かった。
ただいま。と言うと、母は

「おかえり。」

と返事した。

俺は母さんに倒れたことを話そうと思っていたが、やっぱり心配をかけたくなかった。

「どうしたの？」

「・・・なんでもない。」

「そう。」

俺はリビングから立ち去り、自分の部屋に向かった。

自分の部屋に入り、バックをその場に投げて、制服のままベツトに寝転がる。

俺が通っている高校のサッカー部は全国にその名を轟かせるほど有名で、インターハイの常連になっていた。

俺はインターハイに行きたくて、この高校を志望していた。勉強はからきしだった俺だが、幸い、中学の時、全国大会で準優勝した功績で、推薦で簡単に入学できた。そして、サッカーの実力も超高校級相手に充分に通用した。

そして、去年の夏。俺は一年生で唯一のインターハイのレギュラ

ーメンバーになった。

レギュラーからはずれた先輩に妬まれる事もあったけど、実力を見せつければ何も言わなくなった。

そして、インターハイの一回戦。俺は試合中に倒れ、そのまま病院に運ばれた。

検査の為、そのまま入院した。

いくら調べても原因が分からず、三ヶ月が過ぎた。

そして、十月の終わりに医者から

心臓の病だと言われた。

治ることはなく、サッカーすることはおろか、走る事さえ禁止された。走ってしまう度に発作が起こり、寿命は短くなるからだ。けど、日常生活に不便は無く、走ることさえしなければ、天寿を全うできると・・・。

母は泣いていた。父も同情していただろう。見舞いに來ていた宏人も必死に慰めてくれた。でも、俺は実感がわかなかった。長い悪夢だと思っていたから。

そして、退院し、久しぶりに高校に行った。

文化祭は終わったけど、今度の球技大会は出るよ。とみんなそう言った。俺は宏人の制止の言葉を聞かずに、走ってしまった。

発作が起こって、それを宏人が助けてくれた。

宏人に目茶苦茶怒られたのを覚えてる。その時、俺は初めて、「

もう、走ることはできないんだ。」と理解した。

それから、退部してからすぐの俺は、サッカー部の活動を見たくなくて、授業が終わったら、逃げるように学校から立ち去った。

学校にもいたくなく、家にも帰りたくなく、やりたい事ができなくなった俺は、なぜか自殺の事ばかり考えていた。

本気で死のうとは思っていなかった。けど、首つりやビルから飛び降りて死ぬ事を想像していた自分がいたのは、本当の事だ。

そして、十二月になり、あのビルを見つけた。秋から建設が中止されていたビルで、内装だけ未完成。なんとなく、そのビルの中を見てみたかった。

建設途中のそのビルには簡単に侵入できた。階段を上り、最上階で見つけたのが、あの拳銃だった。

俺は「死ぬ事」という好奇心で、そこになぜ拳銃があったのか疑問に思わず、銃口を胸に向け、引き金を引いた。

拳銃に実弾は入って無く、空砲だった。

そしたら、馬鹿らしくなってしまった。さっきまで死にたいと思っていた自分が……。

それから死のうとは思わなくなったけど、やりたい事もなく、俺はサッカー部の活動を未練たらしく見るようになった。

昔の事を思い出してみて、なんとも言えない気分になった。まる

で、体が空っぽのような。いや、医者に病氣のことを宣告されたときから、もう体は空っぽになっていた。
それに、今、気づいただけの話……。

「潮ー。」

リビングから母さんの声が聞こえてきた。

「ご飯にするわよー。」

ふと、時計を見ると、もう七時を過ぎていた。

「今、行くー。」

俺はそう言い、ベットから飛び起きた。

昔のことを思い出しても仕方ない。今の俺は、桐沢晶をどうするかと言うことの方が重要だ。そして、それも明日、桐沢晶と話してから決めれば良いことだ。

今日すべきことは、夕飯を食べる事と明日の世界史の予習だ。

友樹

翌日。

俺はいつもと変わらず、学校での日々を過ごしていた。桐沢晶の事が気になったけど、そう事を急がなくてもいいだろう。

昼休み……。いや、昼休みだと宏人に気づかれる。やっぱり、放課後がいいだろう。

「潮！」

「うわっ！」

いつの間にか目の前に宏人がいた。授業が終わったのか……。考え事をしていて、全然気づかなかった。

「何か考え事でもしてたのか？」

「……宏人には関係ない。」

「なんだそりゃ？ 可愛気ねえー！」

「ちよ、宏人、いたいつつの！」

宏人は笑いながらチョップをしてきた。少しぐらい手加減しろよな。

「そうだ。次は体育だけど、潮はどうすんの？」

体育だって事、今思い出した。いつもだったら見学しているけど、見学すると雑用とか頼まれるから嫌なんだよな。

「あー、保健室で……。勉強してる。」

前までは成績が悪くても良かったが、サッカーができなくなった今、本気で勉強しなければならない。

「そっか、じゃあなー。」

「おう。」

俺は苦手科目である世界史の教科書とサブノートと筆箱を持って、保健室へ向かった。

保健室前の廊下。俺はノックして、保健室に入る。消毒液と湿布特有匂いがした。

保健室には保健教諭と緑色のジャージを着た一年生男子いた。その一年男子は足に湿布を貼っている。捻挫でもしたのだろう。

「あら、潮君。体育、見学するの？」

と先生。

「はい。」

「そっ、じゃあ好きな所に座って。」

俺はテーブルに教科書などを置いて、長椅子に座った。テーブルの向かい側には一年生がいたが、気にせず、この間の授業の復習をする。

えーと、フランスの革命ね……。んー……。

「あ、そうだ……。潮君、友樹君、先生ちよつと職員室に用事があるから。そうね……。十分ぐらいで戻ると思う。でも、何かあつ

たら内線から連絡して。」

「あ、はい。」

先生はそう言うと、保健室から出て行った。ちょうど、先生の足音が聞こえなくなったとき、始業のチャイムが鳴った。

俺が黙々とこの前の授業の復習をサブノートにまとめていると、

「あの。佐伯潮先輩ですよ。」

一年生の男子、友樹とかいう奴が話しかけてきて、俺は顔を上げた。どこかで見たことあるような顔……。どこだっけ？ つい最近見たような気もするし、ずっと前に見た気をする。

そして、俺は、なんで俺の名前知っているのか気になって、

「そうだけど……。ってか、なんで俺の名前知ってるの？」

と聞いた。

「あー、俺の事、覚えてませんか？」

「……。誰？ 同じ中学とか？ そんなん？」

「あ、そうです。佐伯先輩と同じ中学……。というか同じサッカー部でした。」

ああ。だから覚えがあるのか。「友樹」ね……。何回か聞いたことがあるような。でも、顔は知らない、ってか覚えてない。中学のサッカー部は人数が多かったから、部員全員の名前と顔なんて覚えられない。

「俺、今もサッカー部なんつすよ。まあ、目茶苦茶下手くそで、昨日も先輩に叱られて……。」

昨日、叱られてた？　もしかして、昨日見たあの一年生か？

「絶好のチャンスの時、ボールがゴールのすごい上を通りすぎていったあれ？」

「見てたんつすか？」

「・・・まあ、一応。」

「そうっすか・・・。」

それから俺と友樹の両方が黙ってしまい、その沈黙に俺は少し気まずくなって、何か話した方が良いのかと悩んでいると、友樹はいきなり

「佐伯先輩。なんで、サッカーやってないんですか。」

と聞いてきた。

その質問に、俺は教科書を見るふりをして、視線を下に下げた。こいつの顔が見たくなかった。

「どうだっていいだろう・・・そんなこと・・・。」

「どうだってよくないっすよ。」

「お前には関係ないだろ。」

「関係あります。だって、俺、先輩に憧れてサッカー始めたんですから。」

最後の一言に俺は驚いて、次になんて言ったら良いのか分からなくて、必死で言葉を探した。

「・・・はあ、お前・・・何言ってるの？　俺に憧れてるって・・・冗談？」

「マジっすから。」
「笑えない。」

こんなだったら、体育見学して、雑用をしてた方がまだマシだった。覚えたはずの世界史の用語が一瞬で頭から抜けちゃったし。

「あのさー・・・友樹君・・・。憧れるならもつとまともな奴に憧れるよ。俺は・・・。」

「だから知りたいんです。なんで、佐伯先輩がサッカーをやめたのか。部活の先輩に聞いても答えてくれないし・・・。」

こいつは俺が答えるまで聞き続けるだろう。他の話に持っていくのも無理そうだった。無視するのも出来ない。本当の事は話したくない。だったら、こいつが失望する答えを言えば良いんだ。

「教えてください。なんでサッカーやってないのか。」
「・・・サッカーが馬鹿らしくなった。」

そう答えると、友樹の表情はみるみる強ばっていった。

「・・・本気で言ってるんっすか。」
「ああ。サッカーなんてつまんねえだろ。」
「そうっすか・・・。」

そう言うと、友樹は、捻挫した足で立ち上がり、足を引きづりながら、保健室から出て行った。

俺の思惑通り、あいつは俺に失望しただろう。これ以上、詮索してこないだろうし、憧れも抱かないはずだ。

パキ。

「ん？」

何かが折れる音が聞こえて、自分の手の方を見ると、シャーペンの芯が折れていた。勉強をしていたんだと言っこと、すっかり忘れてた。俺はシャー心を少し出して、勉強を再開する。

頼み

放課後。

宏人は部活に行つてしまい、俺は、まだクラスメイト達が無駄話している教室で、自分の席に座つて、外を見ていた。もちろん、振りだけど。本当は、桐沢晶に話しかけるタイミングを探している。クラスメイトがいる教室で桐沢晶を呼び出すなんて、そんな目立つ事をするより、桐沢晶が教室を出たときに話せばいいと思つたからだ。

「潮。」

「あー？・・・悠助？」

悠助だ。サッカー部でクラスメイト。俺がまだサッカー部にいたとき、それなりに仲良くしてた友人。けど、部活をやめてから、サッカー部の同級生達とは自分から避けていたから、最近は全然話してなかった。

「よ、悠助、おひさ。」

「おひさつて、同じクラスの奴に言うか？」

「だけど実際そーじゃん。」

「まあな。でさ、潮。頼みがあるんだけど」

「頼み？　なんだ。」

悠助の頼み事だ。俺に出来る範囲のことならやる。

「えっと、サッカーの事だけど・・・さあ・・・」

悠助はなぜか言うのを躊躇っていた。サッカー部のことだから、俺

に遠慮して言いにくいのかも知れない。

「一年生が部活に入ってきたのよ……。それで、三年は大会があるじゃん。だから、二年が一年の指導するだろ。」

他の学校はどうだが知らないが、ここのサッカー部は三年が大会に出るため、一年生の世話はすべて二年生がやるというのが暗黙の了解になっている。

「それでさ、今年の新入部員かなり多くて、二年だけじゃ指導以前にまとめきれないんだ。」

そつえば、今年の新入部員は二年の二倍近くいるとは聞いた事がある。

「だからさ、潮。その……。もう一度……」

なんだ。そんなに言いづらいことなのか？ いったい、どんな頼みだっけって言う……

「もう一度、サッカー部に入らないか？」

一瞬、悠助が言った言葉の意味が分からなかった。

「確かにお前はあの事があるから、できないけど……。教えるくらいだったら、できるだろ。つか、俺もお前に教えて欲しい。潮みたいな天才がサッカーをしないだなんて、勿体ねえから。」

やっと意味を理解して、俺は答えを考える余裕ができた。

確かに、教えるくらいだったら今の俺でも出来る。サッカーは今でも好きだし、そこに携われるならもう一度入部したい。ただ、なんとなく……。決断できない。

そして、ふと、桐沢晶の席を見てみた。さっきまで友達と話していた桐沢晶はそこにいなかった。もしかして、俺が悠助と話している間に帰った？！

「悠助、俺ちよつと用事思い出した！」

「え……。ちょ……。潮！」

桐沢晶が出て行ってから、そんなに時間は経っていないはずだ。まだ近くにいるだろう。

俺は教室を出て、廊下を見渡す。桐沢晶はいた。あの時と同じで、階段の方に向かっていている。この距離なら、呼べば気づくか？

「桐沢晶！」

桐沢晶は振り向いた。少し驚いていたが、すぐに笑顔に戻って、周りにいる友人に何か言っていると、俺の所に駆けてきた。

「話してくれるの？ あの事。」

「……とにかく、どっか行こうぜ。ここじゃ無理。」

「そう。じゃあ、どこにする？」

その時、俺が思いついたのはあの場所だった。俺は何も言わず、

あの場所に向かう。後ろから、足音がするから付いてきているのだ
ろう。

変化

俺が向かったのは、学校の食堂。本当は昼休み以外立ち入り禁止だけど、ばれなければ大丈夫だろう。

ここだったら誰もこないだろうし、話も外に聞こえない。

「こんな所を選んだ。へえ。」

何が可笑しいのか桐沢晶は、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべていた。

「で、教えてくれる気になった？ 君が本気で死のうとしていたか・・。」

「なあ・・・なんでそんな事に興味があるんだ？」

「教えなーい。」

「じゃあ、俺も教えねえ。」

「えー・・・まあ、佐伯君なら良いかな。」

桐沢晶はいきなり、ブレザーのボタンをはずし始めた。

「ねえ、私の噂してる？」

ブレザーを脱いで、ブラウス姿になると、今度は右腕のボタンを外した。まさか。

「リストカットしているって噂。あれ、本当なんだ。」

右腕の手首。細い手首にあったのは、いくつもの刃物で切ったような傷痕。もう治っているようだけど、その傷痕は一生消えないよう

に思えた。

「あ、もう、やってないよ。やめたんだ。」
「なんで。」

思わず聞いてしまった。桐沢晶はブラウスのボタンをしめて、ブレザーを着る。そして、

「去年の十二月、君を見たのがきっかけ。」

と答えた。

「私ね、去年の十月の終わり、友達といろいろあって悩んで、これ、」

右手首を指差した。

「始めたの。最初は一回だけだったんだけど、どんどんエスカレートしていった。本気で死のうと考えたとき、君があビルに入っていくのを見てね。なにをするんだろうなって思って、ついていったの。そしたら、君が拳銃を持って、自分を打とうとしてたじゃん。でも、空砲で……。なんで、佐伯君みたいなサッカーがうまくて、才能がある人間があんな事をしたんだろうって思って、それから君のことを調べたの。君がどんな人か、すごく興味があつてさ。そうしている内に、私、死ぬこと忘れてるの。」

桐沢晶は一通り喋り終わると、息をついて、髪を耳にかけた。

俺と桐沢晶は同じだ。と、思った。

「次は佐伯君の番だよ。教えて、君の事。」

なんて答えればいいか悩んだ。けど、冷静になりたくない自分がいて、思うままに話したくなった。

「・・・俺はあの時、本気で、死のうとした。病気になってから、死ぬことをずっと考えていた。」

桐沢晶は黙って聞いていた、

「その時、あのビルに入ってみたくなくて、あれを見つけた。それで引き金を引いたけど、空砲。そしたら、急に馬鹿らしくなってさ・・・。死ぬことはやめたけど、今、すっげえ毎日がつまんねえ。」
「もう一度、サッカー部に入ればいいじゃん。」

さっきの悠助と似たような事を言う。

「それ、さっき悠助に言われたよ。」

「だったら入りなよ。私、佐伯君の事、応援するよ。」

応援するよ。か・・・。

「俺が戻っていいのか・・・？」

「・・・うん。」

その一言がやけに心強かった。

「あ、そろそろ部活行かないと。友達に怒られちゃう。」

「へえ。お前って何部？」

「美術部。でも、最近入ったんだ。」

「最近？」

「うん。私、君を知る前までずっと毎日がつまらなかった。でも、君を知ってから変わったんだ。そして、これからは君のことが知りたいって思ってる。良かったら、また話そう。」

桐沢晶はそう言うと、食堂から立ち去った。

桐沢晶が変わったんだから、俺も変わらなくちゃならない。

そう思った。

俺は悠助にさっきの返事をするため、教室に戻った。

終幕

後日。

放課後のサッカー部。ジャージ姿の一年生が必死で基礎練習をしている。今まで教室の窓から見ていたその光景を俺は、今日から目の前で見ることになった。

一応一年生全員、個別に練習を見てやってるけど、そのなかで一番遅れを取ってる、一番下手くそ。あーもう・・・見てらんねえ。

「おい。友樹、ちょっと来い！」

友樹は目茶苦茶不満そうな顔をしながら、俺の所に来た。

「なんですか・・・。」

「なんですかじゃねーよ。お前さ、一人で目茶苦茶遅れ取ってんじゃない。すっげえ、周りに迷惑かけてる事ぐらい分かれよ。それでお前足が・・・。」

「・・・サッカーが馬鹿らしいだの言った人の言う事なんて、聞きたくないんですけど・・・。」

友樹はまだ、あの事を気にしているらしい。確かに、あれは俺がいけなかった・・・。

「ゴメン。」

いきなり謝られて驚いたのか。友樹は呆然としていた。

「あれは全部嘘だ。本当はサッカーがすげえ好き。」

「な・・・なんで嘘なんか。」

「自分が可愛かったからだろうな。逃げてることの理由がほしかった。だけど、今は違うんだ。だから、俺の事、先輩として認めてくれないか。」

友樹は少し悩んでから、

「はい。」

と頷いた。

「じゃ、先輩命令。グランド二十周してこい。」

「はあ!?!」

「先輩として認めたんだろ。ほら、走ってこい。ズルすんなよ。」

「・・・鬼!」

とか言いつつも友樹は案外素直に走っていった。

「潮。」

軽音楽部の方はどうしたのか、宏人が来ていた。

「なんだよ、宏人。」

「なんだよじゃねーよ。俺に何も言わず、いきなりサッカー部に戻りやがって。体の方は大丈夫なのかよ。」

「心配性だな。大丈夫だよ。教えているだけだから。」
「そうか。」

宏人は俺の隣に座って、グランドを走るサッカー部を見ていた。そ

して、

「なあ、何かあったのか？」

と聞いてきた。

俺は宏人に全部話してみようと思った。自分が自殺しようとしたこと、自殺はできなかった事、そして、桐沢晶のこと……。

「佐伯君ー！」

美術室の窓から手を振るあいつに、俺は手を振り替えた。

終幕（後書き）

これでこの話は終わりです。

まだまだ下手くそですが、ここまで読んでくれてありがとうございます。

感想を書いてくれれば嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0165j/>

空砲

2010年10月14日16時55分発行